# 夏目漱石と東工大

## 漱石の本学における講演はいかにして実現したか？ そしてその後日談は？

総理大臣の招待でも，葉書一枚で断ってしまう夏目漱石が本学の前身である東京高等工業学校で講演していた。しかもその講演記録（要旨）が，当時 文芸部が発行していた「浅草文庫」に残されていることが分かった。どのようにして漱石を口説いたのか？漱石はどのような話をしたのか？漱石が後悔したというのは本当か？この他，漱石ないしは漱石の作品を題材に健筆をふるった本学教員（伊藤 整・江藤 淳）も簡単に紹介する。

### 漱石研究者の一文が本学同窓生の目に留まった

夏目漱石（1867～1916）が東京高等工業学校（高等工業）の文芸部に招かれて講演をおこなっていたという耳寄りな情報が寄せられた。“高等工業”といえば本学の前身だ。さっそく調べてみた。情報を寄せてくれた野木政宏（1975 社工，77 MS）は，学生の頃から多方面に興味があり，岩波書店の『図書』(注 1) を定期購読している。その 2014 年 4 月号に「…漱石は…『道草』を書く前年，大正 3 年 1 月 17 日に東京高等工業学校の文芸部に頼まれ…講演をした…」(注 2) と書かれていてビックリするやら嬉しいやらで，「蔵前工業会」に知らせた。そのメールが 私たちの資史料館に転送され，司書経験者が奔走して，講演録を入手することができた (注 3)。

(i) 漱石が講演をおこなった大正 3 年（1914）は今からちょうど 100 年前になること，(ii) その講演録が載っている雑誌『浅草文庫』は本学（高等工業）の文芸部が発行していたこと，(iii) 本学教授だった江頭淳夫（えがしら あつお，ペンネーム：江藤 淳，1932～1999）が『漱石とその時代』をライフワークとして，文芸評論活動を展開していたこと，さらに (iv) 講演の冒頭で漱石が述べていることが非常に興味深いことから，ここに一部を再録し，紹介することにした（全文は，資史料館 Web page の刊行物→よもやま話に掲載）。講演の冒頭が興味深いのは，“出不精”だった漱石が文芸部員の“シツッコイまでのお願い”にとうとう根負けして講演を引き受けることになったと告白しているからだ。漱石については，妻の夏目鏡子（1877～1963）が次のような逸話を残している (注 4)。

### 西園寺首相をソデにした漱石

『虞美人草』を書きかけている最中（1907 年〔明治 40〕6 月 14 日），内閣総理大臣の西園寺 公望（さいおんじ きんもち）さんが，有名な文士を招じて，一夕の雅宴を開くという例の「雨声会」の招待が夏目のところにも参りました。こんなことは めんどうくさいほうの夏目は，すぐに はがきに お断わりの句を書きました。それは，《時鳥（ほととぎす）厠（かわや）半ばに 出かねたり》（トイレ

図❶ 夏目漱石（千円札で慣れ親しんだイラスト）。

図❷ 漱石が本学で講演した話しがでている岩波書店の「図書」。

図❸ 本学の文芸部が発行していた部誌「浅草文庫」。残念ながら，漱石の講演録が載っている第 31 号（1914）の原本は，本学には残っていない。

ベルクソン・ブームの渦中で、漱石はそのような扱いを受けた。『道草』を書く前年、大正三年一月一七日に東京高等工業学校の文芸部にたのまれ、ベルクソンの芸術観を基に「文学の方法と法則」について講演した。前座をつとめたのが中沢臨川で、ベルクソンについて解説書を出していたが、中味は要約と孫引きばかりで頂けなかった。おそらく彼と同列に扱われたのが釈然としなかったのか、漱石の講演はぶっきら棒な調子で終始した。浅薄な中川などと違って、自分の読みは深いとの自負が、漱石のいつもの韜晦を喚びおこしたのではなかろうか。講演が復刻されたときの題目も「おはなし」とつれなかった。だが、そこで彼はつぎのようなきわめて重要な提言をしていた。

（中略）

人文学は、文理にまたがるすべての学術について、すべては人間が創出した学術であるとの立場から、共通点と差異を明らかにしつつ、学術の在り方を問うのを本務とする。工学者の卵を前にして、哲学を介して漱石が文学について論じた東京高等工業学校の場面は、日本の人文学の歴史にあざやかに刻まれている。

（あかぎ　あきお・英文学・学説史）

図❹ 漱石の講演の意義を考察した赤木昭夫の論考（図書2014年4月号（第782号）, 20–25, 2014, 図❶参照）

の途中だから出られません）というのですが，ちょうどそれを書いているところに，私の妹婿の鈴木（注5）が参りまして，それを見て，相手は西園寺候ではあり，はがきとはあんまりひどいじゃないかとかなんとか言っておりましたが，本人はいっこう平気なもので，「ナーニこれで用が足りるんだからたくさんだよ」とかなんとか申して，それを投函してしまいました。

## 漱石の講演内容
## （1914.1.17，大正３年）

私は，この学校に来るのは初めてだけれども，ご依頼を受けたのは決して初めてではありません。2，3年前，田中さん（注6）から頼まれたのです。その頃頼みに来てくださった方は，もうご卒業なさったでしょう。それ以来，数十回の依頼を受けましたが，みんなお断りしました。断るのは面白いからではなく，止むを得ないからで，この止むを得ないことが度重なってお気の毒なので，その結果，今日やって来ました。言わば 根くらべで根が尽きて出てきたようなしまつ。面白い話も出来かねます。今からとにかく一時間ばかり話します。それ故，題なんかありません。◆私は専門があなた方とは全然違っています。こんな機会でなければ，顔を合わすことはありませんが，これでも私は工業の部門に属する専門家になろうとした事がありました。私は建築家になろうと思いました。何故っていうような問題ではない，けれども話のついでに話します。……あんな無愛想な人があれだけ流行る（はやる）のは，やはり技術があるからだと思いました。故に建築家になったら私も門前市をなすだろうと思いました。高等学校時分の事でしたが，親友が私に説諭しました：「くだらない家を建てるよりは文学者になれ」と……そして文学者になりました。その結果は分りません。恐らく死ぬまで分からないでしょう。……◆以前に「日本現代の開化」という題で講演したことがあります。「開化」とは人間のエネルギーで，これが二つの異なる方向に延びていったのが，入り乱れて出来たので，その一つはエネルギーを節約せんとする努力（距離をつめる，時間を節約するなど）で吾々の生活の便を計るのです。これがあなた方の専門のもので，他の方向はエネルギーを消耗せんとするもので文学・美術・音楽・劇等です。私らはこの方面へ向かっていく。この方面からいえば時間・距離なんて云う考えはありません。飛行機のような速いものの必要もなく，堅牢なものの必要もなく，数でこなす必要もない。生涯にたった一つだっていいのを書けばいいのです。即ち，（時短，量産を目指す）あなた方とはかく反対になっているのです。◆二つのものの性質を概括して云う時は，あなた方の方は規律で行き，私共の方は不規律で行く。……あなた方は自由が少ないが，私共は自由というものが無ければ出来ない仕事であります。……あなた方の方で する仕事というものを見ると普遍的すなわち Universal な性質をもっている。私共の方は Universal でなく，Personal な性質を持っている。……（だからといっていい加減ではなく）我々の方でも時には法則が必要です。なぜに必要であるかといえば，これがために作品に Depth が出てくると云う問題になるからである。あなた方の法則は Universal のものであるが，我々のものは Personality の奥に Law があるのです。というのは，既にできた作品を読む人々の頭の間をつなぐ共通のものがあった時，そこに Abstract の Law が存在しているのです。Personal なものが Universal なものでなくとも，百人なり二百人なりの読者を得たとき，その読者の頭をつなぐ共通なものがなくてはならぬ。このものが一つの Law である。文芸は Law によって Govern されてはいけない。Personal である。Free である。……そのものの性質より云えば，（あなた方のものは誰が作ったかは余り問題にならないが）吾々の方のものは Personal なもので，作品を見て作った人に思い及ぶ。……これ程までに芸術とか文芸というものは Personal である。Personal であるから自己に重きを置く。主がなくなったら Personal がなくなるのは当り前で，自己

が無くなれば，芸術はダメである。あなた方が尊ぶことは己でなくして腕である。……吾々の方は人間であると云うことが大切なので，社会上より云うときは，お互いに社会の一員であるけれども，吾々の方は人間ということが大事になる。……◆あなた方の方では技術と自然との間に何らの矛盾もないが，私共の方には矛盾もある。即ちごまかしがきくのです。悲しくないのに泣いたり，嬉しくもないのに笑ったり，腹も立たないのに怒ったり，……これは一種の Art である。Art と人間の間には距離を生じて矛盾を生じやすい。あなた方にも人格にない Art を弄していることもたくさんある。……かく Art は恐ろしい。吾々には Art は二の次で人間が第一なのです。孔子様でなければ人格がない，なんて云うのじゃない。人格と云ったって偉いということでもなければ，偉くないということでもない。個人の思想なり観念なりを中心とするのである。◆一口で言えば，文芸家の本体すなわち Essence は人間であって，他のものは附属品・装飾品である。この見地より世の中を見渡せば面白いものです。私一人かも知れませんが，世の中は自分を中心としなければいけない。……（私たちが世代を重ねるように）芸術家が（能のような）昔の芸術を後世に伝えるために生きているというのも一面では必要かもしれないが……そのように身を殺して仁をなすのは Personality の論法でいくと感心しない。伝承的な文芸家・美術家も必要かもしれないが，人間の本分として，Essential な Personality を発揮することを自覚しなければならない。◆このところが大切なところで十分に説明しなければならないんですが，今日は時間がないから之で止めます。私の云うた事はあなた方と私共の職業の違いから，私共の方を詳しく云うたのだけれども，あなた方の方も或る程度までは応用がききます。あなた方の職業の方面に於いて，幾分か参考になることがあるでしょう。もっとも文芸部の会ですから応用がきかなくっても，威張って左様に云う権利があります。個人としてなり職業としてなり，ご参考になれば非常に私は嬉しい。

## 講演の後日談 1

### 失望：よせばよかったという後悔の念

本学の関係者にとってショッキングな随筆が夏目漱石によって書かれた。朝日新聞に連載されていた『硝子戸の中』（注 7）の 34 回目で，次のような内容だ。

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て，「先生はこの間 高等工業で講演をなすったそうですね」というから，「ああやった」と答えると，その男が「何でも 解らなかったようですよ」と教えてくれた。それまで自分の云った事について，その方面の掛念（けねん）をまるでもっていなかった私は，彼の言葉を聞くとひとしく，意外の感に打たれた。「君はどうしてそんな事を知ってるの」。この疑問に対する彼の説明は簡単であった。親戚だか知人だか知らないが，何しろ彼に関係のある或家（うち）の青年が，その学校に通っていて，当日私の講演を聴いた結果を，何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。「いったいどんな事を講演なすったのですか」。私は席上で，彼のために また その講演の梗概（こうがい）を繰り返した。「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」，「解らないでしょう。どうせ解りゃしません」。私には断乎（だんこ）たるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかしそれよりもなお強く私の胸を打ったのは，止（よ）せばよかったという後悔の念であった。自白すると，私はこの学校から何度となく講演を依頼されて，何度となく断ったのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には，どうかしてそこに集まる聴衆に，相当の利益を与えたいという希望があった。その希望が，「どうせ解りゃしません」という簡単な彼の一言（いちごん）で，みごとに粉砕されてしまって見ると，私はわざわざ浅草まで行く必要がなかったのだと，自分を考えない訳に行かなかった。◆これはもう 1，2 年前の古い話であるが 去年の秋 またある学校で，どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になって，ついにそこへ行った時，私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それに私の論じたその時の

図❺本学の文芸部が発行した「東京工業大学 70 年記念誌」の表紙（1951）。

題目が，若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので，私は演壇を下りる間際（まぎわ）にこう云った。――「多分誤解はないつもりですが，もし私の今御話したうちに，判然（はっきり）しないところがあるなら，どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得（ごなっとく）の行くように説明して上げるつもりですから」。私のこの言葉が，どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は，当時の私にはほとんど無かったように思う。しかしそれから 4，5 日経（た）って，三人の青年が私の書斎に這入（はい）って来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧（ていねい）な手紙を書いて，面会の時間を拵（こしら）えてくれと注文して来た。◆私は快（こころ）よくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確かめた。一人の方は私の予想通り，私の講演についての筋道の質問であったが，残る二人の方は，案外にも彼らの友人がその家庭に対して採（と）るべき方針についての疑義を私に訊（き）こうとした。したがってこれは私の講演を，どう実社会に応用して好いかという彼らの目前に逼（せま）った問題を持って来たのである。◆私はこれら三人のために，私の云うべき事を云い，説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与え

たか，結果からいうと この私にも分らない。しかし それだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかったそうです」と云われた時よりも遥（はるか）に満足なのである。

### 講演の後日談 2
### 誤解にもとづく失望だったことが判明

漱石曰く：この稿が新聞に出た 2，3 日あとで，私は高等工業の学生から 4，5 通の手紙を受取った。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで，いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を，反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充（み）ちていた。なぜ一学生の云った事を，聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して，私の不明を謝し，併（あわ）せて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨（むね）を公けにするのである。

### 本学の学生も
### 事の顛末を記録していた

漱石の講演を聞いた本学の文芸部員は，講演の 1 年後（1915，大正 4 年）に出された漱石のコメント（『硝子戸の中』第 34 話）に，漱石以上に落胆した。講演から 37 年後の 1951 年（昭和 26）に文芸部が編纂した「東京工業大学 70 年記念誌」(図❺) に次のような思い出話が載っている。

### 学生の記憶の中の漱石（1）
### 「30 年前の想出」各務鑛三
（大正 4 年，図案科選科）
（カガミクリスタルの創業者）

大正 4 年ごろは浅草文庫だったか，蔵前文庫だったか校友会雑誌があった。現在民芸で活躍しておられる濱田庄司君の意匠である豪放な木版の表紙は他校の同様誌と比べて断然光っていたものである。その頃 校友会で夏目漱石氏と相馬御風氏[注 8] にお願いして講演をして貰ったことがある。御風氏はベルグソンの哲学という題でむつかしかったが，漱石先生のは 判り良くて話の條（すじ）は，漱石先生自身が生まれつきの偏屈で人に嫌われる事をよく知っているから，医者[注 9] になれば腕さえ良ければ患者はしかたなしに来る，それで医者になろうと思った。蔵前の諸君は技術を身に付けるから，藪（やぶ）でない限りこの点大丈夫だろうという様なお話であった。これが 後日大問題になった。漱石先生 後で，講演の趣意は恐らく蔵前の連中には判らなかったろうと云ったとか，云わなかったとか，久しい間，蔵前の秀才を馬鹿にするなと怒ったものである。……

### 学生の記憶の中の漱石（2）
### 「風俗記」遠山静雄
（大正 5 年，電気，舞台照明家）

……こうした真面目な，堅苦しい学校であったが，ささやかながら音楽部も文芸部もあって，すきな者が集まって居た。人間の自然な欲求からであろう。◆文芸部の講演会に，夏目漱石先生を招聘したことがある。（三十数年前のことで）講演の内容は記憶して居ないが，その後で，当時先生が朝日新聞に連載されていた『硝子戸の中』に「よせばよかったと云う後悔の念」が強く胸を打ったという文章が発表された。そのいきさつはこうである。……【以下，前述の漱石の随筆（後日談 1 & 2）が引用されている】……私もいきり立った一人であるが漱石先生へ手紙を出した中に入っているかどうかは記憶にない。今にして思えば，（漱石に“告げ口”した）かの文学士の蔵前学生観は，嫌味はあるが，多少の妥当性も認められる様に思い，またそれが蔵前学生の瑕瑾（かきん，全体としてすぐれている中にあって惜しむべき小さな傷）にもならぬと思う。……

図❻ 江頭淳夫（江藤 淳）：江藤淳（えとうじゅん）はペンネーム。1932 年 東京に生まれ，慶應義塾大学文学部，同大学院に進む。在学中の 1955 年，『三田文学』に夏目漱石論を連載。それまでの漱石像をくつがえし，漱石研究の新境地を拓いた。大学院を中退後，ロックフェラー財団の招きで渡米し，プリンストン大学で教鞭をとる。1971 年，東京工業大学社会学助教授として招かれ，1973 年 文学教授。当初，社会学概論を，次いで文学概論の講義を担当。『漱石とアーサー王伝説』，『決定論夏目漱石』，『もう一つの戦後史』，『海は甦る』など多くの作品を著した。1976 年 日本芸術院賞受賞。【出典：本学の 130 年史，写真：教員総覧 1985】

### 漱石に関連した本学の教員

江藤 淳（図❻）：漱石といえば，「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと見当がつかぬ。」という書き出しで始まるデビュー作が有名だ。漱石作品の研究・評論では，本学教授を務めた江藤淳が第一人者だった。江藤さんは 20 年近く（1971 ～ 1990）本学で教鞭を執った後，母校の慶応大学に移った。本学に新しく生命理工学部がスタートする年だったので強く印象に残っている。江藤さんは最愛の妻を癌で失ってからは，体調を崩したこともあって，自ら，文芸評論家としての人生に幕を引いた（1999 年，66 歳）。本学で担当していた科目は「文学概論第一」と「文学概論第二」で，“近代以前として，徳川中期以来幕末にいたる文学と思想を検討しつつ，文学諸ジャンルの相互関係”について講義していた。同僚の目から見た「江藤淳」像は，『工学部ヒラノ教授と 7 人の天才』[注 10] で垣間見ることができる。

図❼ 伊藤整：本名は整（ひとし）。1905 年北海道に生まれる。1925 年 小樽高商を卒業，中学教諭となる。1926 年 処女詩集『雪明りの路』を自費出版。1927 年 東京商科大学（現一橋大学）に入学，フランス文学を学ぶ。その後中退。1929 年 処女小説『飛躍の型』を書いて詩から小説に転じた。ジョイスの『ユリシイズ』などを翻訳するとともに，1932 年，評論集『新心理主義文学』を出し評論家として活動。1949 年発足の本学（工学部）英語教室の英文学専任講師として迎えられ，1958 年 教授，1964 年 退官。1963 年『日本文壇史』で菊池寛賞受賞。1965 年 日本近代文学館理事長。1967 年 日本芸術院賞受賞。【出典：本学の 130 年史】

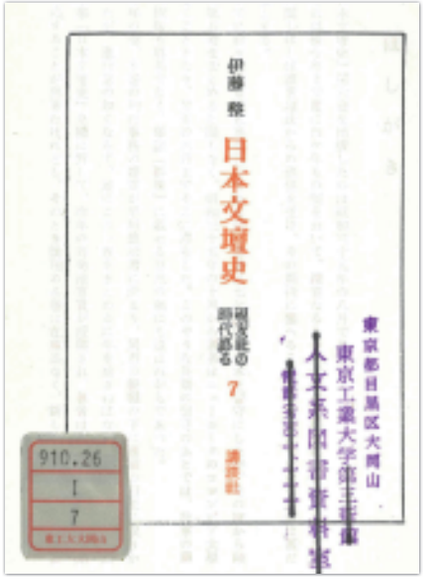
伊藤 整（1905 ～ 1969）（図❼：1949 年に本学に着任し，英語を教えるかたわら，小説家・文芸評論家として活躍した。着任翌年に翻訳した D.H. Lawrence の『チャタレイ夫人の恋人』がわいせつ文書にあたるとして警視庁の摘発を受け，裁判になった。最高裁で有罪とされたが（1957），本学では優遇され，1964 年まで勤めている。伊藤さんは，この裁判を題材に『裁判』というドキュメンタリーを書いている。わいせつか芸術か，新憲法のもとで言論の自由は守られるのかなど，注目を集めた裁判だっただけに，本学の心理学教授 宮城音弥（1908 ～ 2005）[注 11] も伊藤さんを支援した。当然 授業中も裁判のことに話が及ぶ；「心理学の授業だったが，今もよく覚えているのは『チャタレイ夫人の恋人』だ」という受講生が多い。

伊藤さんは，『女性に関する十二章』（1954）がきっかけで一躍人気作家になり，よく徹夜で原稿を書いていた。そのせいか，当時伊藤さんの授業を受けた学生の話では，「成績は，ほとんど満点を貰った」そうだ；丁寧に採点する暇がなかったのかも知れない。

伊藤整は，もう一つ話題性の高い“作品”[注 12] を残している。日光の華厳の滝（けごんのたき，97 m）は，袋田の滝（茨城県，120 m）と那智の滝（和歌山県，133 m）と共に，日本三大名瀑の 1 つに数えられているが，「不可解な」悲劇の舞台になったことでも有名だ。今から 111 年前（1903 年，明治 36），夏目漱石の教え子だった旧制一高生が華厳の滝から身を投げた。傍らのミズナラの木を削って，そこに遺書と思われる「巌頭之感」（がんとうのかん）が書かれていた。その内容は厭世観（えんせいかん）を壮麗にうたいあげたもので，多くの人の心をとらえ，単なる世間的な話題にとどまらず，マスコミ関係者や知識人などを巻き込んだ議論に発展した。

社会の注目を集めたもう一つの理由は，上記のような哲学的な理由は副次的なもので，漱石が授業中にこの学生を叱責したことが直接の原因となったとも考えられたからだ。さらにその後，失恋説も出てきて，数十年を経過した後でも週刊誌（週刊朝日，1986 年 7 月 11 日号）で取り上げられるほど注目度の高いものだった。その記事では，華厳の滝への身投げから 83 年目にして“恋人への遺書”が発見されたと報じ，年上女性への片思いが原因だった可能性があるとしている（その女性は天寿を全うしていたので実名報道；後述するように本学教授の母でもあった）。

この週刊誌報道の 20 年前に，伊藤整はすでに問題の“恋人への遺書”の存在をどこからか聞きつけ，同僚だった本学教授の崎川範行（1909 ～ 2006）から極秘情報を聞き出し，日本文壇史 7 巻[注 11]（図❽）に，夏目漱石関連の出来事として，「明治 36 年（1903），漱石が一高，東大の講師となる……（一高生）自殺事件とその反響……」という見出しでまとめている。身投げした一高生の憧れの的になっていたのが，娘時代の崎川さんの母親だった。以下，伊藤整の解釈を見てみよう。




図❽ 日本文壇史 7 巻のタイトル頁（扉）。抹消線のある第三新館は取り壊され，跡地に現在の西 8 号館が建設された。それに伴い，人文系図書資料室は本館奥の旧々図書館に引っ越した。その後，人文系図書資料室は西 9 号館に移され，跡地は人事課の書庫として使われていたが，2013 年度からは，「資史料館」の一部となっている。

【日本文壇史 7 巻 7 章 p.135 ～ 139（1964）からの引用，一部改変；全文は本学の図書館で読むことができる】その学生は，父を早く失ひ，母の手に育てられ，弟妹三人があった。……少年時代から哲学に興味を持っていた。……◆彼は年弱（飛び級で一高に入学）だったためか，一高に入学して以来思ふほどの成績を上げられなかった。彼は自信があっただけにそれを苦にやんだ。その学生は札幌で育ったのだが，この頃彼は，東大の裏門のすぐ前の邸宅に，幼少時代札幌で顔見知りだった若い女性が住んでゐるのに気づいた。彼はその人を懐かしく思ひ，次第に愛着するやうになった。彼はその家のまはりをさまよひ，しばしば手紙を書き送った。だが彼女は学生より二つ年上で，彼の気持ちには動かされず，反応はなかった。学生は悩んだ。……◆ 1903 年（明治 36）5 月の中頃，夏目はその学生に訳読をあてた。

学生は昂然（こうぜん）として「やつて來ません」と言つた。夏目は「なぜやつて來ないのか？」と訊いた。学生は「やりたくないからやつて來ないんです」と答へた。夏目は怒つたが、氣持を鎮めて「此の次にはやつて來い」と言つた。何日かあとに，また夏目がその学生にあてた。その時も学生は下読みをして來なかつた。夏目は「勉強をする氣がないなら，もうこの教室に出なくてもよい」と言つて叱つた。5 月 21 日の朝，その学生は恋心を寄せていた女性の家を訪ね，玄関で本人に自分の日記と本を渡して去つた。その本は高山樗牛（ちょぎゅう，1871 ～ 1902）の「滝口入道」（平家時代の悲恋物語）で，色々な書き入れがしてあった。そしてその日から学生は行方不明になつた。……（中略）……学生の死は色々な形で各新聞に報ぜられたが，このことは全く表に現はれなかつた。26 日の朝，その学生のいたクラスの第 1 時間目が夏目金之助（漱石の本名）の英語の時間であつた。夏目は教壇へ上るなり，最前列の席の生徒に向つて，心配さうな小さな声で言つた。「君，彼はどうして死んだのだい？」「先生，心配ありません，大丈夫です」とその生徒が答へた。「心配ないことがあるものか。死んだんぢやないか」と夏目が言つた。夏目は数日前に教室で叱つたことが学生の死の原因になつてゐるやうな氣がしたのである。

恋人と目された女性は話題の学生より二つ年上で，本郷の屋敷から人力車で麹町の女子学院に通っていた。神田方向から一高に通う学生とは道すがら挨拶を交わし，時折，学生が手紙を手渡すような間柄にすぎず，学生の気持ちがから回りしていたようだ。

崎川さんは，自分の母親の独身時代の話（一高生との関係）は 2 回しかしていないという。最初は 1957 年（昭和 32）秋で，当該一高生の親友でかつその妹と結婚し，後に文部大臣を務めた安倍能成だった。もう一度は，本学の同僚だった伊藤整から，「『日本文壇史』に書き残したいのでどうしても教えてほしい」と迫られて母の抱える秘密を話した。母が 1982 年（昭和 57）に 97 歳で亡くなった時に，遺品の中から“焼いたはず”の学生の手紙と書き込みのある本『滝口入道』が出てきて驚いたそうだ。手紙と本は，歴史的資料として，日本近代文学館（伊藤整が設立に尽力した）に寄贈した。ここら辺のやり取りを週刊朝日がスクープしたもの（1986 年 7 月）と思われる。

一高生が，華厳の滝を見下ろす断崖絶壁の上に立ってよんだ辞世の句「巌頭之感」は，当時の時世とマッチして「人生不可解」という流行語を生み，身投げの原因（注 13）についても，厭世・漱石・失恋というように，いろいろと取りざたされたが不明のままとなっている。

## 資料の移管・寄贈のお願い

本学にも資史料館（博物館 資史料館部門）ができたので，今後は，歴史的に重要な文書が失われることはないと期待されるが，それも関係者の方々に貴重な文書類を資史料館に移管するという手続きを踏んで頂いて初めて可能となるので，積極的な移管をお願いしたい。

---

（注 1）月刊『図書』：古今東西の名著の裏話，心を打つヒューマン・ストーリー，人生への思索などを綴るエッセイを掲載した読書家のための小雑誌。高校時代から『図書』を定期購読している野木さんによれば「物理学・化学・生物学・天文学・考古学・文化人類学などの先生方も寄稿しているのでコンパクトな教養雑誌」としてお勧めだそうだ。

（注 2）赤木昭夫，「ベルクソンとの交響—漱石の哲学遍歴（最終回）」，図書 2014 年 4 月号（第 782 号），20–25，2014。赤木さんは NHK で科学番組を担当した後，慶応大学や放送大学の教授を務めた。私共の博物館の特命教授である道家達將とは旧知の仲で，放送大学では同僚だったことから，今回の記事を書くにあたっては大いに盛り上がった。赤木さんには本学の 1 年生向けの特別講義の 1 コマを担当して貰ったことがある。世話教員は道家達將だったが，多くの教員までが聴講につめかけてくれ嬉しかったそうだ。科学番組や報道のあり方，さらには説得力の鍛え方に加え，英語の速読の勧めも学生には有益だったようだ。チェルノブイリの原発事故（フランスのワインへの影響まで取材していた）や日航機の御巣鷹山墜落事故などの扱い方にはジャーナリストとしての高い見識がにじみ出ていた。

（注 3）夏目漱石，「おはなし」（講），浅草文庫（大正 3 年 5 月号）第 31 号，1–9，1914。山下浩（監修），漱石復刻全集 3「漱石評論・講演復刻全集」第 7 巻 明治 45 年（大正元年）～大正 3 年（1912 ～ 1914），ゆまに書房，217–225, 2002。

（注 4）夏目鏡子（述）・松岡譲（筆録），「漱石の思い出」，文春文庫，文藝春秋，1994。丹治伊津子，「『虞美人草』の頃—西園寺首相をソデにした漱石」，虞美人草「京都漱石の會」会報 3 号，6–8, 2009：“百年の後に生き残るものこそ，世を照らすものであるというのが，漱石の志であった。どのような学問の権威であろうとこの世は，「百の博士も土と化し，千の教授も泥と変ずる」のが習いだと見通す目はまことに厳しい。「文を以って百代の後に伝へんと欲する」ために（大学教授の道を蹴ってまで）選んだ作家の道であれば，漱石が（職業作家としての）第一作となる作品に渾身の情熱をそそぐのは当然……（トイレに象徴される『虞美人草』の執筆を優先するのは当然だったと思われる）”。

（注 5）鈴木禎次（1870 ～ 1941）：静岡市に生まれ，東京帝大 工科大学造家学科を卒業し，三井銀行建築係，イギリスとフランスに国費留学（1903，明治 36）。帰国後は，名古屋高等工業学校（現 名工大）の建築科教授を務めた。「西園寺首相をソデにした漱石」事件が起きたのは，鈴木が建築学教授をしていた 1907 年。

(注 6) 浅草文庫の後付けには，編集兼発行人として田中喜一の名がある。

(注 7) 随筆『硝子戸の中』:『こゝろ』と『道草』の間に書かれた随筆で，書斎を「硝子戸の中」と見立てている。1915 年（大正 4）1 月 13 日～ 2 月 23 日にかけて 39 回にわたって朝日新聞に掲載された。最後の随筆となった（漱石が 50 歳目前で亡くなったのは，1916.12.9）。物議をかもしたのは，その 34 回目。

(注 8) 相馬御風ではなく，中澤臨川（1878～1920，文芸評論家・電気工学者）と思われる［夏目漱石，「おはなし」（講），浅草文庫（大正 3 年 5 月号）第 31 号，1–9，1914］。

(注 9) 医者ではなく，建築家と思われる。［夏目漱石，「おはなし」（講），浅草文庫（大正 3 年 5 月号）第 31 号，1–9，1914］。

(注 10) 今野浩，「工学部ヒラノ教授と 7 人の天才」，青土社，2013。江藤淳と吉田夏彦（記号論理学，現名誉教授）が犬猿の仲だったことは有名だが，当時を知る人の話では，2 人がとうとう銀座で決闘をすると言い出し，その立会人を頼まれた道家達將は困り果てたことがあったそうだ。立会人の機転で鉄砲が舌鋒となり，最後は酒を飲んで平穏な別れとなった。道家さんは“決闘”場所として指定された煉瓦亭は今もよく覚えているそうだ。「両雄並び立たず」とはよく言ったものだが，両雄を並び立たせた道家さんもたいしたものだ。

(注 11) 宮城音弥も伊藤整と同じ 1949 年に本学に着任している。自著「心理学入門」（岩波新書）を副読本として受講生に勧めていた。精神医学が専門で，「患者さんがドアを開けて入ってきて座るまでの間に，ほぼ診断がつく」といっていた。最終講義の時は，テレビカメラ写りがいいようにと軽く紅をさしていたのが印象的だった。

(注 12) 伊藤整，日本文壇史（講談社）7 巻，7 章，1964（昭和 39 年）。取材元となった崎川範行（燃料工学）と当博物館の道家達將は，現役時代に親しかったが，“華厳の滝”は話題に上らなかったそうだ。

(注 13) 最近の分析：堀 正士，「一高生の“哲学的自殺”についての精神病理学的一考察」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 第 22 号，139–146，2012。

---

2014 年 10 月

（発行）東京工業大学 博物館 資史料館部門

http://www.cent.titech.ac.jp/Publication_Archives/pg701.html

博物館 部門　東京工業大学 博物館　資史料館 部門

152-8550 東京都 目黒区 大岡山 2-12-1-E3-12　03-5734-3340　centshiryou@jim.titech.ac.jp
http://www.cent.titech.ac.jp/

大谷 清（館長，理事・副学長）
亀井宏行（教授，博物館部門長）
奥山信一（教授，兼担）
内川恵二（教授，兼担）
広瀬茂久（特命教授，資史料館部門長）
道家達將（特命教授）
遠藤康一（特任講師）
阿児雄之（特任講師）
渡利美知子（補佐員，司書）
渋谷真理子（補佐員，司書，資史料館）
尾野田純衣（補佐員，学芸員）
佐々木裕子（補佐員，学芸員）
益津玲子（補佐員，ライター）

広報・社会連携課（博物館担当）
秋友豊香（課長）
乙津昌弘（主任）